

紹介

ギイ・アシャル著（西村昌洋訳）

『古代ローマの女性たち』

本書は、王政期から帝政期までのローマの女性について論じた、文庫クセジュの一冊である。「訳者あとがき」によれば、著者はキケロやレトリック論、政治イデオロギーなどの専門家である。わが国において西洋古代の女性史関連著作は多くなく、本書のようにローマの女性を主題とした書物は、他にないと言つてよいだろう。ローマ人の愛や性、家族、日常生活といった観点からごく断片的に女性に言及する邦語文献はあるものの、ローマの女性を包括的に語る試みはなされていない。新書サイズの翻訳書とはいえ、本書にはローマ女性の全体像を描き出すための契機となることが期待される。他地域、他時代の女性との比較研究のためにも、本書は検討の基礎を提供していると言えよう。

紹介
内容に移ろう。はじめに、ローマ女性の矛盾した表象が紹介される。著者は、ロー

マが一〇〇〇年以上の時間幅を持ち、共時的にも様々な立場の人々がいた社会であったことを指摘する。ローマ女性の平均ではなく、その多様な姿を描こうとするのが本書の基本的な姿勢である。

第一章は、王政から共和政中期の女性について。著者がこの時期の女性像の再構築を重視していることは、本章に最も多くの紙幅を割いていることから窺える。古い時代に光を当て、伝統的にあるべき女性の姿として語られてきた像を探り出していることが、本書の特徴と言えよう。この時期、ローマの女性は威厳と従属性という、相反する性質を持つ存在であった。こうした女性像は、後の時代にも社会の底流で生き残り続けるのである。

第二章では、共和政末期の女性の境遇が描かれる。この時期、女性の地位と態度において大きな変化が見られた。特に上流階級では、多くの面で女性の解放と呼べる状況が現れる。著者は変化の原因を家族構造、政治、経済、社会、文化、宗教、観念などの側面から考察する。しかし、こうした解放はあくまで高貴な女性や性的な奔放を選んだ女性たちに限定されており、政治の表

舞台に立つのは依然として男性であった。

第三章は、帝政初期からセウエルス朝期まで。前半部では皇帝をも動かす逞しい女性たちが描かれるが、フラウイウス朝以後、女性の自立と奔放の傾向は控えめになる。

ストア主義の影響で、義務ではなく愛情に基づいた結婚という価値観が広がり始め、より均衡の取れた夫婦観への変容が見られるのもこの時期である。本章の最後では、キリスト教がローマの伝統的な女性観の揺り戻しに貢献したことが述べられる。

結びでは、女性の解放は限定的で、その後均衡の回復が訪れたこと、帝国弱体化の騒乱のなか、女性たちは社会の退廃の最後の砦と考えられていたことが指摘される。

本書は、前後の時代との比較を意識しながら女性の境遇を描いており、読者は全体的な流れを理解しやすい。個々の事例についても、幅広い資料の性質を考慮しながら丁寧な分析がなされている。また、すべての章で奴隷や解放奴隷、娼婦など下層の女性について言及されており、資料の許す限りでローマ社会の多層性を描き切ろうとする著者の意欲が感じられた。近年、奴隷制やセクシユアリティ研究との隣接分野とし

て、古代世界の亮春に関する研究が注目されている。本書の原著は一九九五年の出版だが、こうした動向からも本書の価値を再確認することができるだろう。さらに、本書は女性史に留まらない広がりをも有しており、女性の境遇の変遷や役割を、男性という要素と共に考察することで、バランスの取れた両性の関係史を描いている。本書は一般の読者を想定したものが、今後この分野を学ぼうとする者にとって、必読の書になると言える。訳者による的確な訳注も、初学者にとって大いに助けとなるであろう。

(新書判 一六七+iii頁 二〇一六年五月)

白水社 税別二二〇〇円)

(小山田真帆 京都大学大学院文学研究科修士課程)

Isabella Lazzarini,

Communication and Conflict:

Italian Diplomacy in the Early

Renaissance, 1350-1520

一五世紀イタリアは、大使の駐在化と外

交組織の恒常化を特徴とする「近代的外交」の起源として考えられ、イタリアで培われた「外交技術」が、ヨーロッパ各国に広まったとされる。ところが近年、公権力や統治者が派遣した大使や仲介者が、中央集権化していく都市国家において果たした政治的・文化的役割が評価されるようになる。このような流れにおいて、ルネサンス期外交を専門とする著者I・ラッザリーニは、従来は別々に分析されてきた、交渉、情報収集、代理、コミュニケーションといった実践に焦点を当て外交を捉えることを試みた。彼女は、都市国家が領域国家を形成し半島がモザイク状の政治的権力主体によって構成されていた時期を、長いQuattrocento(一三五〇―一五二〇)として分析を進めた。

本書は、全二二章によつて構成されるが、その章立てもイタリア半島内外の都市・地域の事例が交差するユニークなものと言える。第一部「枠組み」では、外国勢力も巻き込む複雑な勢力図(第一章)や外交を担う主体の多様性とそれが形式化していく過程(第二章)、外交実践の中で作成される書簡や歴史文学、覚書の持つ史料的价值

(第三章)が検証される。次に第二部「政治的行動としての外交」では、情報(第四章)、交渉(第五章)、コミュニケーション(第六章)が取り上げられ、外交交渉におけるツールや戦略としての情報の役割などが考察される。ここでは、権力や資源、司法権をめぐる紛争を調停・解決に導く、共有された政治的言葉の機能が着目される。

さらに第三部「実践としての外交」では、スキルや素養を持った外交の主体(第七章)が行う儀礼やその選任・任命(第八章)、外交が行われる場(第九章)が取り上げられる。最後に、第四部「政治的言葉と文化的プロセスとしての外交」では、口述・筆記といったコミュニケーションの形態(第十章)、感情と理性のバランス(第十一章)、交渉における言葉や語彙(第十二章)が分析される。特に、言葉については、複数の通訳者を通じてベルシアやエジプトと交渉を試みたイタリアの君主が考察され、ラテン語や俗語にとどまらない、言葉のネットワークが描かれる。

以上のように本書では、イタリアの都市国家の事例にとどまらず、外国との交渉も含めた事例から、柔軟な外交が実証されて